

都会で
或は千九百十六年の東京
芥川龍之介

【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ
(例) 靡《なび》いた

[#]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定
(例) ナイホク [# 「ナイホク」に傍点]

一

風に靡《なび》いたマツチの炎《ほのほ》ほど無気味《ぶきみ》にも美しい青いろはない。

二

如何《いか》に都会を愛するか？ 過去の多い女を愛するやうに。

三

雪の降つた公園の枯芝《かれしば》は何よりも砂糖漬にそつくりである。

四

僕に中世紀を思ひ出させるのは厳《いか》めしい赤煉瓦《あかれんぐわ》の監獄である。若し看守《かんしゅ》さへみなければ、馬に乗つたジアン・ダアクの飛び出すのに遇《あ》つても驚かないかも知れない。

五

或女給の言葉。 いやだわ。今夜はナイホク [# 「ナイホク」に傍点] なんですよ。
註。ナイホク [# 「ナイホク」に傍点] はナイフだのフオオクだのを洗ふ番に当ることである。

六

並み木に多いのは篠懸《すずかけ》である。橡《とち》も三角楓《たうかへで》も極めて少ない。しかし勿論派出所の巡査はこの木の古典的趣味を知らずにゐる。

七

令嬢に近い芸者が一人《ひとり》、僕の五六歩前に立ち止まると、いきなり拳手の礼をした。僕はちよつと狼狽《らうばい》した。が、後《うし》ろを振り返つたら、同じ年頃の芸者が一人、やはりちゃんと拳手の礼をしてゐた。

八

最も僕を憂鬱にするもの。 カアキイ色に塗つた煙突《えんとつ》。電車の通らない線路の錆《さ》び。屋上《をくじやう》庭園に飼《か》はれてゐる猿。……

九

僕は午前一時頃或町裏を通りかかつた。すると泥だらけの土工《どこう》が二人《ふたり》、瓦斯《ガス》か

何かの工事をしてゐた。狭い路は泥の山だつた。のみならずその又泥の山の上にはカンテラの火が一つ靡《なび》いてゐた。僕はこのカンテラの為にそこを通ることも困難だつた。すると若い土工が一人《ひとり》、穴の中から半身を露《あらは》したまま、カンテラを側《わき》へのけてくれた。僕は小声に「ありがとう」と言つた。が、何か僕自身を憐《あはれ》みたい気もちもない訣《わけ》ではなかつた。

十

夜半《やはん》の隅田川《すみだがは》は何度見ても、詩人 S・M の言葉を越えることは出来ない。 「羊羹《やうかん》のやうに流れてゐる。」

十一

「××さん、遊びませう」と云う子供の声、 あれは音《おん》の高低を示せば、×× San [# 「San」は3度位右上がり] Asobi-ma show [# 「show」は30度位右上がり] である。あの音《おん》はいつまで残つてゐるかしら。

十二

火事はどこか祭礼に似てゐる。

十三

東京の冬は何よりも漬《つ》け菜《な》の茎の色に現《あらは》れてゐる。殊に場末《ばすゑ》の町々では。

十四

何かものを考へるのに善《よ》いのはカツエの一番隅の卓子《テエブル》、それから孤独を感じるのに善《よ》いのは人通りの多い往来《わうらい》のまん中、最後に静かさを味ふのに善いのは開幕中の劇場の廊下《らうか》、.....

[# 地から1字上げ] (昭和二年二月)

底本：「芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房

1971 (昭和46) 年6月5日初版第1刷発行

1971 (昭和46) 年10月5日初版第5刷発行

入力校正：j.utiyama

1999年2月15日公開

2003年10月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。